

(1) 基本的に

伝統医学では、第2次性徴の出現前までが子供。本格的な刺鍼は控え、ローラー鍼などの小児鍼や灸、皮内鍼や円皮鍼などを用いる。

正中線で縦方向を、脇腹で横方向を、末端の手足の指で経絡を整えるのが基本。気が上がりやすいので、陽明を使って気を下げる。

特に、歩けない段階、座位が充分に決まらない段階では、胴体部を中心に施術。手足の経絡と胴体の関係は、歩くようになってからの立位での重力負担の分担に由来しているため。

子供、特に、赤ん坊は野生動物。小児鍼などは、動物の母親が子供を舐めることと同じ。子供は触ることが大切で、ツボなど分からなくても全身触り続けることが効果的。特に、喘息やアトピーなど。

歪みや痙攣が大人並の子が増えている。そういう子の治療は本格的な刺鍼が必要だが、案外嫌がらないことが多い。じっくり説明し納得してもらい、刺鍼する。接触鍼をしてみて、無理なく鍼が入っていくようなら、そのまま刺入。

白砂糖を始め甘い物を食べ過ぎている子供は、ツボが消えにくいし、消えても直ぐに復活しやすい。化学調味料、精製塩、添加物も。詳しくは→[3]古いツボ、古い病で出るツボ。

(2) ツボが出やすい所

正中線上、脇腹、手足末端、陽明経が基本。細かくツボを取るよりも、その辺り全体を整えるつもりで見えていくのがよい。

正中線上では、身柱の近くの肩甲間部、命門の近くの腰部、後頭部、臍の周り。

脇腹の近くでは、京門、章門、帯脈など。

子供は気が上がりやすいので、手足の陽明で上がった気を降ろす。特に手の陽明前腕。疳の虫など気が上がり方の激しい症状には、手陽明の末端に灸。

手足末端は、経絡的な変動調整に向く。井穴、指端、指裏横紋端などや、指の間の水掻き状の部分にある八邪八風がよく使われる。

症状別では、クスグったがる所が狙い目。肺や呼吸関係の症状では、中府、肩貞、肩甲間部。消化器系の症状では、中腕や、結腸が横行から下降に移る辺り、胃の六灸で有名な膈肝脾俞など。

心の凝りには、膻中、勞宮。疳の虫には、手陽明の示指・拇指側の二間、井穴、指端（寫の灸）。

切り傷、虫刺されには糸状灸。擦り傷は棒灸で灸（あぶ）る。打撲は、境目と中心に糸状灸（または、局所冷却）。

慢性病で、普段は立ち歩いている状態なら、足の指端、指裏横紋端、女室、失眠などに灸して、じっくり経絡的な調整をしていくとよい。

脳性麻痺などで、歩くのが下手だったり座位が決まらないなら、胴体部の正中線と腰～脇腹を改善し、背骨がS字状に立った状態を作ることと、指など末端を刺激することを併用する。また、末端の灸の他に、体の強張った部分を解（ほぐ）していくことも関節可動域の改善に役立つ。体幹部の大きな歪みが改善されないと手足の細かいリハビリは効果が出にくい。また、親子関係が壊れないよう、操体など子供が喜ぶ方法を工夫した方がよい。

(3) 手順

小児鍼の手順は、肩甲間部を縦に往復し、命門から脇腹を横に往復し、手前腕陽明経を肘から手首に向けて動かして仕上げるのが基本。陽明は、気を降ろすのが目的なので、手首から肘方向へは動かさない。

子供は「コロコロ」と呼んでローラー鍼が好きだが、硬めの歯ブラシでもよいし、この順でクスグってもよい。乳児ではブローブラシや使い古しの書道の筆で充分なことも多い。

症状別の出ているツボがあれば、手前腕の前に付け加える。

灸は、座位、うつ伏せ、仰向けの順で、補の灸。後始末に、手示指指端に、殆ど捻らない糸状灸で軽く寫。子供は逆上せやすいので。骨空や親指側の指関節横紋端でもよい。

要点

- ① 子供は野生動物、触ることが大切
- ② 東洋医学的には、第2次性徴出現以前が子供
- ③ クスグったがる所が、狙い目の一つ